早播栽培における小麦「テクゴイズミ」の収量向上と出穂期の葉色に応じた施肥技術

○坂梨二郎・上野育夫・1) 井手真一
（熊本農研室・1) 天草地域振興局）

【目的】 小麦「テクゴイズミ」は、標準播種（11月下旬）より早い11月中旬に播種すると、成熟期が早まり梅雨前の5月内に収穫できるが、早播により子実タンパク質含有率が低下する傾向がある。この対策として、精糀が俊さあるいは出穂後10日目の追肥が一般に普及しつつある。本研究では、テクゴイズミ向に有効な出穂前後の追肥技術に加え、出穂期の葉色に応じた施肥方法を明らかにする。

【材料及び方法】
農産園芸研究所水田（厚層腐植多湿黒土）において前作-水稻跡に「テクゴイズミ」を供試した。播種期は2003年、2004年、及び2005年とも慣行より15日程度早い11月10日前後に行った。栽培方式は畦立て4条播（畦幅150cm、条間25cm、播幅10cm）で播種量は0.5kg/haとした。1区面積は7.5m²で1区制で以下のように施肥を実施した。

<table>
<thead>
<tr>
<th>試験区</th>
<th>基肥</th>
<th>追肥I</th>
<th>追肥II</th>
<th>追肥III</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1（前）</td>
<td>0.5</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1, 0.2, 0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>0.5</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1, 0.2, 0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>0.5</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1, 0.2, 0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>0.5</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1, 0.2, 0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>0.5</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1, 0.2, 0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>0</td>
<td>0.2</td>
<td>0.2</td>
<td>0.1, 0.2, 0.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【結果及び考察】
11月中旬に水稈後小麦「テクゴイズミ」を早播した場合の施肥体系は、10a当たり窒素成分で基肥5kg-分げつ肥1月下旬2kgの施用した場合、2月下旬の追肥を窒素成分で10a当たり2kg施用することで、穂数及び収量が確保された（図1）。

また、この場合、出穂前直前の葉緑素計値は39〜41となり、出穂後10日目に窒素成分で10a当たり1〜2kg施用することで、子実タンパク質含有率を適正値の10〜11%とすることができた（図2）。さらに出穂直前の葉色が42以上の場合は、出穂後の追肥の必要はないと推察された（図3）。また、葉緑素計値での葉色は、25個体の葉色判定で判定できることが判った（図4）。

図2 止葉の葉緑素計値とタンパク質含有率（H16, 17, 18）